

【パレスチナ】 終わらない現実としての パレスチナ

錦田愛子

パレスチナ映画はドキュメンタリーがいい。六〇年以上続く紛争の複雑な現状は、登場人物をとりまく一場面として切り取るだけで否応なく映し出される。そこに何らかのドラマ性やストーリーを書き込む必要はない。映画は現実や歴史的背景を反映するばかりでなく、イスラエルとパレスチナの力関係を含めた現実の一部を自ら体現しているからだ。

パレスチナを描く作品は、二〇〇〇年代以降、その数が急速に増えた。ミシェル・クレイフィやエリア・スレイマー

対話や相互理解を続けることの難しさを示した例だった。

『アルナの子どもたち』において、インティファダはさらに残酷な爪痕を示した。イスラエル・ユダヤ人の平和活動家アルナのおかげで憎しみを克服したかにみえた子どもたちは、闘争の末、悲惨な結末を迎える。映画を見て、彼らが選んだ道を批判的に捉える者もいるだろう。援助関係者には、その活動の意義について厳しい問いを突き付ける内容であった。だが一方で、パレスチナ人の間でこの映画が強い共感と呼んだのも事実だ。難民キャンプで出会った青年は筆者に「ラストシーンは涙なしには見られなかった」と語った。それは、闘争に参じる青年アラに自分の姿を投影しての思いだったようだ。

これらの映画で描かれる和平への取り組みは、フィクション映画であれば、ハッピーエンドにさせることも可能だろう。だが実際には、対立する両者の間に立って物事を進めようとするこのリスタは大きい。『アルナの子どもたち』のジュリアーノ・メーラ・ハミース監督は、映画公開の数年後、撮影場所であったジェニン難民キャンプで何者かに殺された。母親のアルナに代わり、子どもたちの文化教育に関わり続けて「自由劇場」を再開させるなかで死であった。

同様に、イスラエルとパレスチナの対立のはざまに入り、子どもの命を救おうと苦闘する人々を描いた作品もある。

ン、ハーニー・アブリアサドなど名の売れた監督を中心に、国際映画祭に出品されて受賞する作品も出てきた。また一方で、ビデオカメラの入手が比較的容易になったことで、これまで映画とは縁のなかったアマチュアや映像関係のセミプロが、新たにドキュメンタリーを撮り始めている。

『プロミス』、『アルナの子どもたち』などは、そのなかで日本でも公開され、話題を呼んだ作品だ。どちらも子どもを主人公に扱った映画で、幅広い層から親近感を得やすかったせいもあるだろう。テーマとなる紛争下での対話や情操教育の試みというのは、オスロ合意（一九九三年）以降の和平プロセスのなかで援助関係者が積極的に取り組んできた活動のひとつだった。

だが映画で描かれるそうした活動の結末は、必ずしも観衆に希望を抱かせるものではない。『プロミス』での対話の試みは、その直後に始まった第二次インティファダ（二〇〇〇年〜）を受けて頓挫し、子どもたちは互いに会えない状態に逆戻りした。愛くるしい笑顔で注目を集めたデヘイシャ難民キャンプの少女サナベルは撮影後の二〇〇二年三月、オスカー賞の授賞式に訪れていたアメリカでCBSテレビのインタビュに答え、「自爆攻撃する気持ちはよくわかる。私も志願するかもしれない」と言って『プロミス』のファンを落胆させた。イスラエル軍の戦車がパレスチナ自治区へ侵攻し、彼女の自宅の近くまで迫るなか、

る。二〇一一年に日本でも公開された『いのちの子ども』は、その試みが政治と不可分に結びつくなかでの当事者たちの苦悩を描いた。ガザ地区に生まれた先天性の免疫疾患をもつ赤ん坊は、骨髄移植をしなければ助からない。しかしパレスチナ自治区には治療が可能な病院がないため、赤ん坊はイスラエルの病院で手術を受けることになる。治療費を工面するためにイスラエルのニュース番組で寄付を呼びかけたのが、この映画の監督であり番組レポーターのシユロミー・エルダーだ。

手術がイスラエルのプロバガンダに使われるのでは、と心配する両親。治療の合間での会話で、子どもの母親は彼に「エルサレムのためなら子どもを殉教作戦にささげてもよい」と語る。だがその発言は、彼が回すカメラの向こう側の観客を意識してのものだった。エルサレムはパレスチナ人だけにとつての聖地ではない。世界総人口約一五億人のイスラーム教徒に共通の聖地を守ることを「よきムスリム」の責務として課せられ、他方で母として子どもの命を守りたいと願う母親の葛藤が、一見矛盾した言葉に表れていたのだ。

宗教だけでなく、政治的、社会的にも外部世界と強く連動するパレスチナ。その抵抗運動も、とりわけ近年では、諸外国からの支援とつながり展開されてきた。分離壁建設*₂に対する反対運動は、特に国際的な注目を集めた運動のひ

とつた。エルサレムからほど近いビリン村で毎週金曜日に開かれる抗議デモには、イスラエルを含めた世界各国から多くの支援者・運動家が集まり参加してきた。

そんなビリンでの運動を地元住民の視点から撮り収めた作品が『壊された五つのカメラ』だ。有名になったビリンへは、パレスチナの政治家も足を運び、メディアを引き連れて来て演説をぶつ。しかし壁の建設により土地を奪われ、デモをして拘束され、イスラエル軍による深夜の家宅捜索を受けるのは、毎日の生活をそこで送る村人たちだ。何年にもわたり繰り返されるデモの様子を監督のイマードは淡々と撮り続ける。これがつまり、パレスチナ人が占領に対して続けるスムード（アラビア語で「堅忍不拔」の意味）による抵抗の記録なのだ。

ここまで挙げたのはすべて、パレスチナ自治区における二〇〇〇年前後の動きを描いたドキュメンタリーだが、この他にもパレスチナを扱った映画は多数生まれている。なかでも筆者が注目しているのは、レバノンで撮影された作品群だ。

自治区の映画がイスラエルによる占領に焦点を当てるのに対して、レバノンで取り上げられるのは、内戦の記憶、または長期化する難民生活の厳しさだ。どちらも深刻な人権侵害をはらむ問題だが、オスロ合意以降は国際社会の関心が自治区に集中しているせいか、これらの映画は、有名

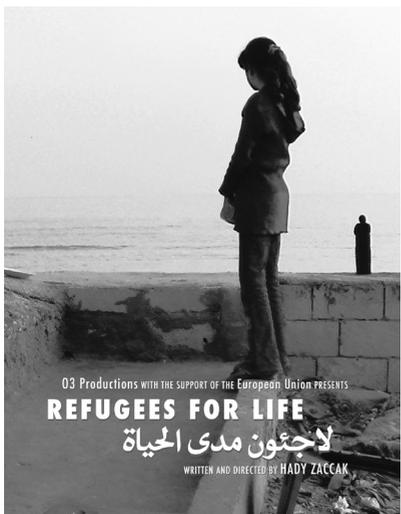
なメイ・マスリ監督のものを含め、ほとんど日本語字幕化されていない。

『ガザ病院』は、内戦中のサブラー／シャータイラー難民キャンプにあった実在の病院の名だ。そこで起きたできごとを、当時の映像の記録と元スタッフへの最近のインタビューをもとに再構成したのがこの作品だ。内戦当時、病院で働き続けたマレーシア人女医アン・スウィー・チャイが話の中心に据えられており、日本人の視聴者には親近感を抱きやすい。一九八二年に起きた虐殺にも触れられるが、映画全体が適度にアーティスティックなカットで編集されており、また生存者の話を中心に描写されるため、そこだけが際立つ内容にはなっていない。むしろ、ひき続き起きた「キャンプ戦争」当時の様子など、病院の歴史全体のなかで虐殺が位置づけられており、大きな事件が起きた後のことは忘れられがちな難民の存在に注目を向けさせる構成になっている。

『無期難民』は、レバノンを代表する社会派映画監督のハーディー・ザッカークが、移住を試みるパレスチナ難民を描いた作品だ（写真）。レバノン南部に多い集住地区や難民キャンプに住むパレスチナ人が、就労制限や低所得に苦しむレバノン国内での生活から逃れるためにヨーロッパへの移住を試みる実例を、地元NGOの協力で取材している。移住後の生活はどうなっているのか、期待した通りの結婚せざるを得ないなど、思うに任せぬ移住の実態が明らかに。映画のラストシーンで、移住に成功した若者は語る。「すべてのアラブに伝えたい、ヨーロッパに来ようなんて考えない方がいい」と。

パレスチナ難民をめぐるさまざまな問題状況については、連作の『難民の年代記』がテーマごとにまとめられた秀作として挙げられる。ここでは広河隆一氏の作品『パレスチナ1948——NAKBA』で有名になったパレスチナ人の離散から始まり、ガザ難民を含むマイノリティの事例など包括的に問題が取り上げられている。これら国際的にも一定の評価を受けた作品が今後邦訳されれば、報道が伝える断片的情報だけでなく日常までも含めたパレスチナ問題の実態が広く知られることにつながるだろう。

総じてみて、パレスチナのドキュメンタリーは、見終わった後に、希望や展望を抱いたり、もしくは絶望や終息感を覚えるなど、明確な印象をもてない作品が多い。不安と希望が入り混じった曖昧さが漂い、辛い場面を目撃してしまった観客が、その後の展開への道標もなく放り出されるような落ち着かなさが残る。だがそれが、むしろいいかもしれない。外部者にとっては一過性の経験でも、当事者たちにとっては終わらない現実として続く占領や難民としての生活。それを忘れてはならない、とそこに暗示されているのだから。



写真『無期難民』ポスター

●注

*1 イスラエル占領下のパレスチナ人が、西岸地区とガザ地区(パレスチナ自治区)を中心に起こした抵抗運動。非武装を中心とした第一次と比べて、第二次ではパレスチナ側が投石の他に自爆攻撃などを行ない、それに対してイスラエル側が自治区への軍事侵攻や暗殺作戦を行なうなど、激しい武力衝突が起きた。

*2 イスラエル人居住区を隔離する目的で、イスラエル政府がパレスチナ自治区内に二〇〇二年から建設を始めた分離障壁。総延長八一〇キロで、高さ八メートルのコンクリート壁や電気フェンスなどから成る。

*3 レバノン内戦終盤の一九八五年、シリア派組織アマルが、対立するPLO(パレスチナ解放機構)との抗争で難民キャンプを包囲したことで起きた戦闘。長期間にわたる封鎖・攻撃でキャンプでは餓死者も出た。

*4 第三次中東戦争(一九六七年)でガザ地区の住居を追われ、ヨルダン川東岸へ逃れたパレスチナ難民。ヨルダン国籍を得ることができず、無国籍状態で就学や就労差別を受ける。「パレスチナ学生基金」ではUNRWAとの協力で、ガザ難民への支援を行なっている(<http://palestinescholarship.web.fc2.com/>)。

映画リスト

『アルナの子どもたち』……①أولاد آمنة / أولاد آمنة / Amna's Children ②ジュリアーノ・メール・ハミース、ダニエル・ダニエル、③二〇〇三年、④イスラエル、パレスチ

著者紹介

デー・ザッカーク、③二〇〇六年、④レバノン、⑤アラビア語、英語、⑥国内で上映会。

①氏名……錦田愛子(にしきだ・あいこ)。

②所属・職名……東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助教。

③生年・出身地……一九七七年、広島県。

④専門分野・地域……パレスチナ／イスラエル研究、移民／難民研究。

⑤学歴……東京大学法学部(公法コース)、東京大学大学院法学政治学研究科・修士課程(政治専攻)、総合研究大学院大学文化科学研究科・博士課程(地域文化学専攻)。

⑥職歴……東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所非常勤研究員(三〇歳、二年)、早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手(三二歳、一年)。

⑦現地滞在経験……ヨルダン(講談社野間アジア・アフリカ奨学金奨学生、二六歳、二年間、現地調査)、パレスチナ／イスラエル(ヘブライ大学トルーマン研究所客員研究員、三四歳、八ヶ月、現地調査)。

⑧研究方法……フィールドでは人から話を聞いたり行事に参加したりするほか、資料調査やアンケートなど、目的に応じて研究手段を変えている。ヨルダン留学で学んだアラブ諸国への人付き合いのあり方が、その後の調査で役に立っていると感じる。

⑨所属学会……日本中東学会、日本国際政治学会、移民政策学

会、⑤アラビア語、ヘブライ語、英語、⑥国内各地で上映会。

『この子ども』……①أولاد آمنة / أولاد آمنة [尊い命] / Precious Life ②シュロミー・エルダール、③二〇一〇年、④アメリカ、イスラエル、⑤アラビア語、ヘブライ語、英語、⑥劇場公開、DVD販売。

『ガザ病院』……①مستشفى غزة / Gaza Hospital ②マルコ・パスキーニ、③二〇〇九年、④レバノン、イタリア、⑤アラビア語、英語、⑥未公開。

『ここはなへ、あちらはなへ』……①لا مهربان ولا مهربان / Neither here nor there ②ビシャム・カイイド、③二〇〇六年、④レバノン、⑤アラビア語、⑥未公開。

『壊された五つのカメラ』……①Five Broken Cameras ②イマド・ブルナート、ガイ・ダビディ、③二〇一一年、④パレスチナ、イスラエル、フランス、オランダ、⑤アラビア語、ヘブライ語、⑥劇場公開。

『難民の年代記』……①Chronicles of a Refugee ②ペルラ・イーサ、アーセル・マンズール、アダム・シヤピロ、③二〇〇八年、④不明、⑤アラビア語、⑥未公開。

『パレスチナ1948—NAKBA』……①الناكبة / Nakba ②広河隆一、③二〇〇八年、④日本、⑤日本語、アラビア語、英語、⑥劇場公開、DVD販売。

『Promises』……①وعدت / Promises ②ジャスティーン・シヤピロ、B. Z. ゴールドバーグ、カルロス・ボラド、③二〇〇一年、④アメリカ、⑤アラビア語、ヘブライ語、英語、⑥劇場公開、DVD販売。

『無期難民』……①الجنّة مدي اللاجئين / Refugees for Life ②ハー

会、京都ユダヤ思想学会。

⑩研究上の画期……オスロ合意(一九九三年)とその後の和平プロセスの崩壊。和平の実現という課題は、国際政治というマクロな視点だけでなく現地住民によるミクロな視点からも見る必要があると感じた。

⑪推薦図書……沢木耕太郎『深夜特急』(一〜六巻、新潮社、一九九四年)。

⑫推薦する映画作品……『君のためなら千回でも』(原題『The Kite Runner』)マーク・フォスター監督、二〇〇七年、アメリカ)。